

地域づくり発展期を担う大学の役割

～東かがわ市丹生地区での実践～

長尾 敦史

- I. はじめに
- II. 地域の概要
- III. 実践活動
- IV. まとめ

I はじめに

香川大学では、2013年度より文部科学省「地（知）の拠点整備事業（以下、COC事業）」の採択を受けて香川県内の7市町および香川県と連携し、地域の課題解決を図る取り組みをプロジェクトベースで行ってきた。プロジェクトが解決すべき課題は多種多様であり、自治体ごとに活動の範囲や領域が異なる。本事業は、地域づくりと教育プログラムの2つ性格を持つ。本稿では、その中の一つのプロジェクトとして香川県東かがわ市でのプロジェクトを事例として取り上げる。本学における香川県東かがわ市での調査研究については、研究室単位や企業単位では、いくつかあったが、自治体と本格的にスタートしたのは、2013年からである。東かがわ市での活動の中心は、地域の課題を地域で解決するための協働によるまちづくりの推進であり、具体的には市内10ほどの地区を概ね旧小学校単位に分け、各地区でコミュニティ協議会（以下協議会）の立ち上げと運営を支援している。

本稿では、1地区目の東かがわ市相生地区に続き、2地区目となった東かがわ市丹生地区についての活動報告を行う。東かがわ市丹生地区では、2014年より活動を始めたが、2022年3月現在で、8年の歳月が流れている。2014年から2015年をスタートアップ期、2016年から2020年を発展期と設定している。地域づくりスタートアップ期の報告（長尾ら [2020]）を参照されたい。本稿では発展期の中でも様々な取組を充実させていった2016年度についての活動報告を行う。

II 地域の概要

東かがわ市のプロジェクトは、アクションリサーチ（長尾ら [2018]）を用いている。教員、学生らが日常的に活動に取り組み、地域の実情を把握し状況やタイミングを考えてアクションを起こし、変化を評価分析することで次のアクションにつなげている。

調査地域の香川県東かがわ市は、面積152.8km²、人口31,031人 高齢化率は、39.6%（2015年国勢調査）である。丹生地区は人口4,930人、高齢化率35.4%（2015年国勢調査）である。高齢化率は東かがわ市内で最も低い。高松市から最も近く、主要幹線道路である国道11線沿いにはロードサイド型店舗があり、駅や郵便局がある土居地区や町田地区を中心に街区を形成している。東かがわ市内には数少ない住宅団地がありベッタウン的な要素と馬篠漁港や山田海岸など漁村的な要素、さらに農村的な要素をあわせ持つ地区

である。この地区の地域課題は、2013年3月に小学校が廃校になったことで、地域を見直すことを余儀なくされたことである。香川大学と地域づくりで協働している丹生地区活性化協議会（以下、協議会）は2014年4月に地区内にある12自治会を中心に設立された。協議会は、東かがわ市から指定管理を受けて、コミュニティセンター（小学校及び幼稚園の跡地）の運営と管理を行っている。また活動の資金は、市からの地域コミュニティ活性化交付金制度によって支えられている。協議会の組織体制（図1）は、自治会長、婦人会、老人会、体育協会などで構成する理事会を中心に総務・企画部会、施設・管理部会の部会制をとっている。有志が自主的に活動を行うというより地縁的集団の性格が強い。地域づくりでは、カリスマ性のあるリーダーが一方向的に引っ張ることで成功する事例は多いが、この地区の場合は、突出したリーダーではなく複数の人がリーダーの役割を分担する形をとっている。

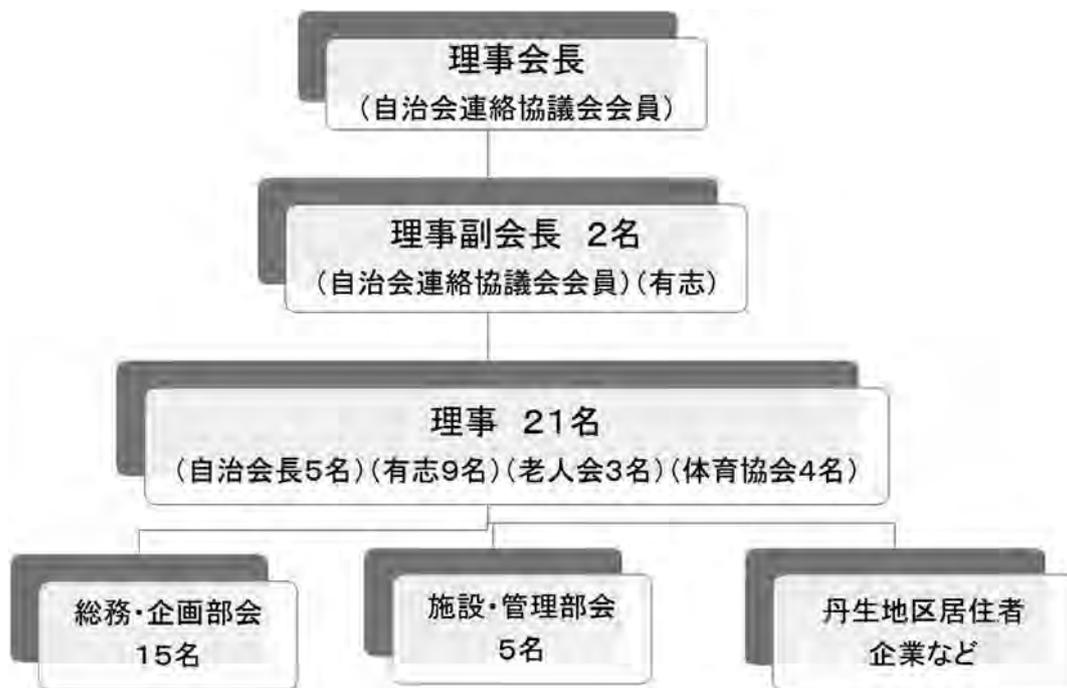


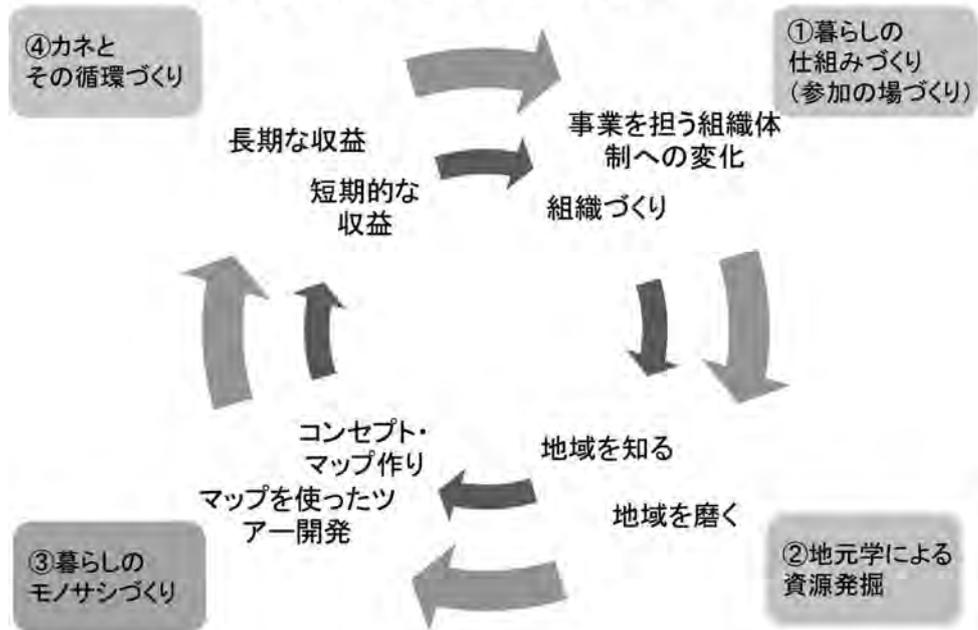
図1 発足当時の丹生地区活性化協議会組織図

Ⅲ 実践活動

Ⅲ-1 プロジェクトの進め方

東かがわ市でのプロジェクトの進め方は、小田切 [2014] が提唱する「地域づくりのフレームワーク」を参照にして、それを地域づくりの進展に応じてPDCAを回す香川大学型アクションリサーチモデル（長尾ら [2018]）（図2）として実施した。小田切 [2014] は、地域づくりの3つの柱として、暮らしのものさしづくり、暮らしの仕組みづくり、カネとその循環づくりをあげている。筆者は、この3つの柱がプロセスを経ることで、状態がどのように変化するか過程を明らかにする動的モデルとしてアクションリサーチモデルを提唱する。このアクションリサーチでは、香川大学の学生がすべての過程に関わりを持ち、地域の方々と活動を共にする。2016年度の活動は、以下の①～③までのことを充実させる活動である。

香川大学型アクションリサーチモデル



- ①組織づくり「暮らしの仕組みづくり」(参加の場づくり)
 第1サイクル...組織づくり
 第2サイクル...事業を担う組織体制への変化
- ②地元学による地域資源の発掘
 第1サイクル...地域を知る
 第2サイクル...地域資源の磨き上げ
- ③主体づくり「暮らしのモノサシづくり」
 第1サイクル...コンセプトづくり、マップづくり
 第2サイクル...マップをつかったイベント、ツアー開発
- ④コミュニティビジネス「カネとその循環づくり」
 第1サイクル...イベントによる短期的な収益
 第2サイクル...カフェ運営、農産物の栽培などによる長期的な収益

図2 香川大学型アクションリサーチモデル

Ⅲ-2 2016年度の活動報告

2014年から2015年度は、地元学による資源調査、丹生地区の住民を対象にした丹生ジオサイトツアーの実施など、協議会と共同で地域づくりの第一歩となるような活動を行ってきた。活動する学生も1年次から活動を共にしてきた2名の学生も2年生後半になり、また1年生も2名加わり、4名体制となっていた。しかし、2015年に実施した協議会での次年度に向けての会議の場で学生たちが強くお叱りを受けた。当時の発言を一部抜粋して紹介する。

- ・昨年したまち歩きはどうなったのか、昨年集めた情報は怎么样了のか、メンバーが変わったのは言い訳にならない。

- ・活動がもとにもどってはいないか、マップを作った次の段階をやりたい（看板作り・サイクリングロード等）。
- ・相生ふるさとマップのようなものが欲しい、しかし同じものは求めていない。
- ・地区ごとにテーマが違ったものでも面白いのではないかと、いろんな種類のマップはどうか、何部に分かれて作成してもよいのではないかと。
- ・前回のまち歩きで時間がなく言い残したことがまだまだある。
- ・マップやまち歩きの利用を協議会や地元自治会がすべきである、そういった地元の協力を引き出す。
- ・小学校がなくなった今では拠点はコミセンか子ども園しかない、子どもの声が聞こえるまちが良い。
- ・マップを作って、子どもたちと一緒にまち歩きはどうか、防災マップ作りはどうか。
- ・コミセン祭りに新しいコーナーを設けることに関しては賛成、お祭りで地元意識を育む。

スタートアップ期の2年間は地元学による資源発掘やジオサイトツアーづくりなど、地域を知って、それを活かした活動を中心にやってきたが、活動がじっくりこなかったのは否めない。それが協議会での発言でもよく表れていた。そこで2016年度からは、アクションリサーチモデルの①の「暮らしの仕組みづくり」に重点を置き、②地元学による資源発掘、③暮らしのモノサシづくりのプロセスを実施することとした。

(1) 「丹生いきいき会議」の実施

参加の場づくりとして、協議会のメンバーと香川大学とで地域のまちづくりについて話し合う会議である。毎月1回開催している。地域住民の参加者は、10名前後である。大学側（主に学生）が司会進行を行い、地域住民から様々な意見を引き出し、目的に合わせて意見をまとめる役割を担った。また、2016年6月8日の丹生いきいき会議からは、会議内容をまとめた「丹生いきいき便り」を毎会議後に発行し丹生コミュニティセンターの掲示板に掲示した。「丹生いきいき便り」の目的は、前回の会議の内容を振り返り議題を進めること、丹生いきいき会議の認知度向上の二点である。

表1 2016年度の開催状況

日 時	主な議題	大学側人数	地域住民側人数
5月11日（水）13：30～	マップ作成 マップ活用方法 ジオサイトツアー	5	15
6月8日（水）14：30～	マップ作成 ジオサイトツアー	5	15
7月6日（水）14：30～	マップ作成 ジオサイトツアー	4	4
8月10日（水）15：00～	マップ作成 ジオサイトツアー コミセンまつり	5	12
9月7日（水）15：00～	マップ作成 マップ活用方法 コミセンまつり	4	8
10月19日（水）15：00～	マップ活用方法 コミセンまつり	3	6
11月16日（水）15：00～	マップ活用方法 コミセンまつり	5	6
12月14日（水）15：00～	マップ活用方法 コミセンまつり 来年度の活動	4	5
2月1日（水）15：00～	マップ活用方法 来年度の活動	5	4
2月22日（水）15：00～	来年度の活動 勉強会	6	6



写真1 2016年度に発行した「丹生いきいき便り」

5月11日 13:30~15:00 大学側5名 地域住民15名(男性15名)

2015年度から引き続き「丹生サイクリングマップ」の案について話し合った。大学側からマップのラフ案を提出し、表記内容やマップのレイアウトについて意見交換した。また依頼する印刷会社やマップ完成後の整備について話し合った。そして、2016年度の「絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー」についての企画を行った。

6月8日 14:30~15:30 大学側5名 地域住民15名(男性14名、女性1名)

前回の内容の振り返りを行い、「丹生サイクリングマップ」のターゲット層や納品日など印刷会社に依頼する際に必要な情報を決定した。具体的なマップの案が決定したため、地域住民のマップに対する思いをポストイットに記入して、マップの最終案へ反映した。また、「絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー」の船の手配について検討した。そして、この回より、会議の内容をまとめ、次回会議日程をお知らせする「丹生いきいき便り」を会議後に発行することにした。

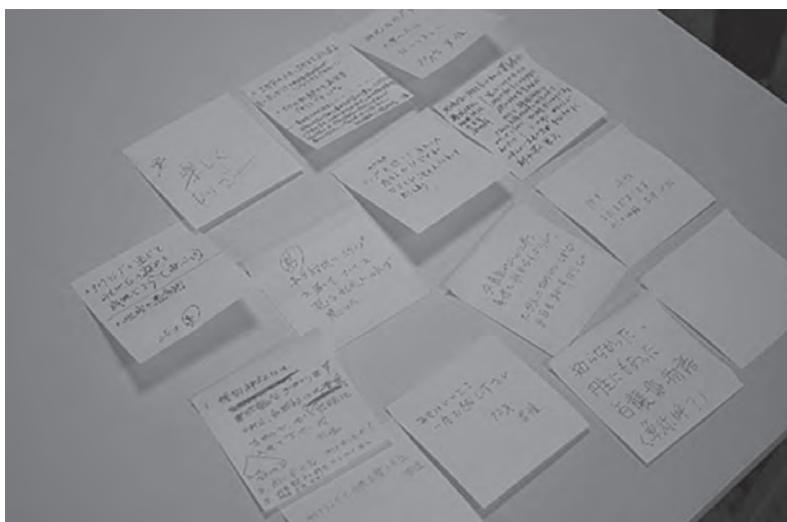


写真2 ポストイットに書かれた地域住民のマップに対する思い

7月6日 14:00~15:50 大学側4名 協議会側4名(男性4名)

前回の振り返りを作成した「丹生いきいき便り」を見せながら行った。「丹生サイクリングマップ」に関しては、マップテーマに関連するキャラクターを書き起こし掲載することとなり、レイアウトの変更に了承をいただく。マップ内に地区紹介の欄を設けるために、丹生地区の良い点を書き出すワークショップを行った。「自然」「食」「お祭り」「その他」でテーマを分けて行い、マップの丹生地区紹介の欄に反映させた。また、前回の会議に引き続き、「絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー」について、当日の注意事項等について話し合った。



写真3 「丹生サイクリングマップ」のデザインについて話し合っている様子

8月10日 15:00~16:30 大学側5名 地域住民12名(男性12名)

「丹生サイクリングマップ」について、印刷会社によるデザイン案が完成したので、地域住民を二つの班に分けて意見交換を行った。そして、いただいた意見を印刷会社に伝えデザインに反映した。また、「絹島・丸亀ジオサイト見学ツアー」の実施後だったため、報告と反省を行った。最後に、「第三回丹生コミセンふれあいまつり」について、展示ブースやワークショップの企画を行った。

9月7日 15:00~16:00 大学側4名 地域住民8名(男性8名女性1名)

「丹生サイクリングマップ」について、これまでの作成経緯を確認し、前回までに出た意見を踏まえて修正して最終デザイン案を見ていただき、了承を得た。今後のマップの活用計画については、配布場所やサイクリングコース案内看板について意見交換を行った。また「第三回丹生コミセンふれあいまつり」について、展示ブースやワークショップの具体的な企画にあたり、必要な準備物やブースの設置場所を確認した。

10月19日 15:00~16:30 大学側3名 地域住民6名(男性6名)

「丹生サイクリングマップ」が完成したことを報告し、全戸配布の実施やサイクリングコース案内看板

の設置場所案について確認した。また、地域住民からマップに掲載しているキャラクターの活用方法の意見をいただき、使用权や使用頻度を話し合った。会の最後には、マップ完成にあたっての感想や活用案を全員から一言ずついただいた。「第三回丹生コミセンふれあいまつり」については、チラシの香川大学ブースの掲載にあたっての確認等を行った。



写真4 丹生サイクリングマップ

11月16日 15:00~16:00 大学側5名 地域住民6名(男性6名)

「丹生サイクリングマップ」について、サイクリングコース案内看板の具体的なサイズや素材を話あった。大学側からはデザイン案を提出し、意見をいただいた。また、マップに掲載しているキャラクターの使用权について、印刷会社との協議の結果、キャラクターの権利は印刷会社が有するとなったため、今後キャラクターの使用頻度が高まることを予想し、学生が作成したキャラクター原案をもとに改めてキャラクターを作成することとなった。「第三回丹生コミセンふれあいまつり」について、タイムスケジュールや役割分担などの最終確認を行った。まつりのスタッフジャンパーや案内看板、チラシ等に上記のキャラクターを活用していくこととなった。

12月14日 15:00~16:30 大学側4名 地域住民5名(男性5名)

「丹生サイクリングマップ」について、サイクリングコース案内看板のサイズに合わせたデザインの詳細を決定し、その他マップに関連する諸整備について議論した。また「第三回丹生コミセンふれあいまつり」の反省を行い、来年度に向けて改善点を話し合った。最後に来年度の活動について、今後「丹生いきいき会議」をどう進めていくべきか議論した。また話し合いの中から丹生地区の問題を浮かびだした。

2月1日 15:00~16:30 大学側5名 地域住民4名(男性4名)

「丹生サイクリングマップ」の諸整備について確認した。また、来年度の活動に向け、今年度の活動の振り返りを行った。その中から前回の会議に引き続き、丹生地区の問題について話し合った。また、一年間を通じて「丹生いきいき会議」を継続して行った感想を参加者全員から一言ずついただいた。

- ・方向性がわからない。どう進んでいけばよいのか。なにが活性化なのか。香大生からは参考になる意見が欲しい。
- ・大勢の意見をたくさん聞ける場でよい。相手（香大生）からしっかり返答が返ってくるのでよい。自治会交流が必要で、それぞれの色を出せたらよい。（地区対抗など）
- ・他の人の出席がもっと必要。人が少ないと視野が狭まる。新しい意見がみえる、聞けるのでよい場である。自治会長だけだとまとまらないが学生によってまとまる。参加者数を上げる必要がある。
- ・マップを作る際に伝説やしきたりなどを調べたのはよかった。とにかく動き出せているので活性化の一步になっている。あるひとの考える「活性化」はそれぞれの立場で違うだろう。自分は体育協会・老人会をやっているの、そこから考える。「子供の声が聞こえない」という意見があったので、月1で幼稚園児とふれあう機会をつくっている。今後は小・中学校との交流も企画したい。

図3 2月1日「丹生いきいき会議」参加住民からの会議の感想

2月22日 15:00~16:00 大学側6名 地域住民6名(男性6名)

来年度の活動に向け、今年度の活動報告会について確認を行った。また、まちづくりについての勉強会を会議参加者で行った。大学側で大学での授業等の内容から、まちづくりの手法を提案し、丹生地区での問題点を議論した。

(2) 「第三回丹生コミセンふれあいまつり」への参加

11月27日に「第三回丹生コミセンふれあいまつり」が丹生コミュニティセンターとアリーナ（旧丹生小学校体育館）で開催された。この催しは生涯学習講座の発表会やバザーなどが主なイベントであり地域内の関係性強化に重点を置いている。2016年度は企画・運営に香川大学も参加し、丹生いきいき会議（8月10日・9月7日・10月19日・11月16日）で企画の話し合いを行った。香川大学はこのイベントの参加の目的は、普段話すことのできない丹生地区住民と触れ合うことで、住民への活動の周知と、より幅広い意見の聞き取りを行うことであった。前日は準備の手伝いを行い、当日は駐車場でワークショップとしてクリスマスカード作りと、展示ブースで今年度の活動報告の展示を行った。また、午前中に行われた体育館でのミニ運動会と午後から行われた発表会の司会を学生が担当した。



写真5 ミニ運動会での司会を担当している様子

クリスマスカード作りでは、約30名の幼児～小学生が参加し、準備しておいた画用紙やマスキングテープなどを利用して立体のクリスマスカードを作成した。無料で行い、学生二人が見本を見せたり、カッターやハサミの使用時の安全確認を行ったりした。



写真6 子供たちのクリスマスカード作成を手伝う様子



写真7 2016年度の活動報告の展示の説明やアンケート調査の協力を依頼している様子

IV まとめ

本稿では、アクションリサーチモデルであげた、組織づくり「暮らしの仕組みづくり」（参加の場づくり）を中心に年間の会議の様子を報告した。会議に参加した地域住民の当事者意識の向上が見られた。それにより、毎回の会議では必ず全員から一言以上発言が上がり、活発な議論を交わすことのできる場となっている。また、地域住民側からサイクリングマップで展開したキャラクターを第三回丹生コミセンふれあいまつりのスタッフジャンパーに使用するという案も提案され、大学との活動を地域住民自身の活動と捉えている。これらより、地域住民がまちづくりに対する当事者意識を高まっていると考える。

また、会議を継続的に行うことや、丹生いきいき便りを作成したりワークショップ形式での会議にした
り会議の進め方を工夫することで大学側と地域住民側と得意分野で役割分担して活動することができ、前
年度に比べ両間の信頼関係をより深く築くことができている。

地域住民にとって大学は年度ごとに人間が入れ替わる組織であり、毎年、人間関係を構築するという難
しさがある。しかし、大学との活動を通じて、その難しさの中から出てくる交流が地域づくりを始めてや
がて住民自ら地域づくりを実践するいわば、地域づくりの「にじみだし」のようなことを垣間見えること
ができた。

毎月の話す内容を学生たちが考え、香川大学から30キロ離れた町で会議を行うことを1年間通すことは
容易ではない。東かがわのプロジェクトを実践する学生にはいつも感謝をしている。

注) 本稿の記述は、丹生地区活性化協議会の運営の巧拙を示すことが目的ではない。

[参考文献]

- ・鈴木健大、原直行、古川尚幸、西成典久、山田香織（2018）「全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」における実践と教
育効果に関する検証」『香川大学教育研究』pp175-188
- ・吉本哲郎（2008）『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書
- ・小田切徳美（2009）『農産村再生』岩波ブックレット
- ・小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波新書
- ・原直行（2016）「住民による地域づくり活動の必要要素と活動評価に関する研究」『地域活性学会2016年度研究大会論文集』
- ・原直行（2017）「住民による地域づくり活動と創発戦略」『地域活性学会2017年度研究大会論文集』
- ・長尾敦史、原直行（2018）「地域づくりと大学の役割」『地域活性学会2018大会論文集』
- ・長尾敦史（2019）「地域づくりスタートアップ期を担う大学の役割 ～東かがわ市での実践を通して～」『香川大学地域連携・生涯
学習センター研究報告 第24号』pp.55-62